



HOKKAIDO OUTSIDER ART FORUM 2010

北海道アウトサイダー・アート・フォーラム 2010

北海道の創作現場レポート

ごあいさつ

「アート」はあらゆるジャンルを超えて、人間の作り出すという根底のエネルギーを表現するものです。時に繊細に、ダイミツクに、ショッキングに、その表現方法は無限です。近年、世界的に注目されている「アウトサイダー・アート」といわれる品群は、文化や伝統、流行などとは無縁に制作されたもので、既存のアートの枠組みから大きく逸脱した、極めて自発的な表現を持ったものとして人気となっています。創作者達は作家という自覚が無く、やむにやまれぬ衝動から創作しています。それだけに、創作者の強い想いがストレートに表現されています。

日本では「アウトサイダー・アート」を、とかく「障害者のアート」として誤解されてしまいます。確かに、作家の中には知的障害のある人や精神疾患のある人なども多く、その創作現場も福祉現場が目立ちます。しかし、このアートのカテゴリーの中には障害のない人達も含まれます。重要な点は「既存のアートの概念にとらわれる事のない自発的な表現」という事です。また、「アウトサイダー・アート」という呼称を差別として嫌う人も多くいます。確かに「アートの外側のアート」という意味ですら、そう感じるのも当然かもしれません。しかし「アート」を専門としている人達にとっては、「アウトサイダー・アート」という呼は素晴らしく魅力的であり、賞賛からこのように命名されたものなのです。なぜなら、概念を超えた極めて個性的な表現を常にアーティストは望んでいるからです。また、既に「アウトサイダー・アート」という呼称は日本の芸術界の中でも固定化しているのが現状です。

「アウトサイダー・アート」にはもっと大きな課題があります。特に問題なのは、作家に作家としての自覚がないという事です。これはアウトサイダー・アートの魅力でもあります。発表する機会や管理する事を自発的に作家本人がしないために、作品は人の目に触れる事なく消失してしまいます。ですから、作品を収集、保管、発表する活動には、必然的に協力者が必要となってきます。

NPOラボラボラでは、これまで多くのアウトサイダー・アートを発掘し、ギャラリーや美術館などでの発表に繋げてきました。中には、フランスのバリ市立美術館で展示された作品もあります。これらの活動を支えてくれたのは、身近に作家を支える家族や福祉現場の職員の協力でした。作家を支える環境を家庭や福祉現場で継続して整えていく事は非常に困難な事です。多くの課題を抱えながらも、それでも作家の意志を尊重して積極的に支えていこうとする姿勢には、いつも敬服しています。しかし、こうした地道な活動はなかなか評価される機会が少なく、また横の繋がりが持てずに孤立してしまいがちです。そこで、このたび情報の共有や課題を議論する場として「北海道アウトサイダー・アート・フォーラム2010」を開催する事といたしました。これによって、アウトサイダー・アートの魅力、そして現状と課題を一般の人を含めて多くの人と有したいと願っております。

また、このフォーラムに際して、北海道内で先駆的な活動をされている関係団体の活動内容を収録したのが本冊子です。今後、アウトサイダー・アートを支える関係者のお役に立てればと願っております。

最後になりましたが、快く取材に応じていただきました関係者様、助成頂きました日本財団様、太陽北海道地域づくり財団様、地道な取材活動により執筆いただきました今津智士氏に感謝申し上げます。

NPOラボラボラ 理事代表 / 陶芸家
工藤和彦

北海道の創作現場レポート

障害者支援施設	あかとき学園	深川市	...	P03-04
上川圏域アートネットワーク	ウエカルバ	上川圏	...	P05-06
NPO法人アートユニオン・オコック		網走市	...	P07-08
地域活動支援センター	さくらんぼ	札幌市	...	P09-10
社会福祉法人とともに福祉会		札幌市	...	P11-12
社会福祉法人草の実会(リトルローズ)		札幌市	...	P13-14
社会福祉法人剣淵北斗会 知的障害者更生施設 剣淵西原学園		剣淵町	...	P15-16
社会福祉法人 当麻かたるべの森 かたるべの森美術館		当麻町	...	P17-18
YY(ワイワイ)		剣淵町	...	P19-20
大雪の園 (社会福祉法人 鷹栖共生会)		鷹栖町	...	P21-22
NPOラボラボラ		旭川市	...	P23-25

障害者支援施設 あかとき学園

深川市納内町3902番地
担当者：阿部 光子さん

「活動の概要」

あかとき学園でのアート活動は、重度化・高齢化する利用者の多種多様な日中の生活介護サービスの一つとして取り組まれています。

アート活動は午後の1～2時間の中で行なわれており、対象者となる人は50名ですが、興味を持って創作している人は15名程度ようです。

創作活動の場所は多目的に使われている体育館と訓練室ということです。

施設開設時、あかとき学園は知的障がい者更生施設（入所）で、著しく精神・身体に障がいをきたす方は少数で、生活ものんびりして、支援内容も多岐に及ぶ事はそれ程なかったそうです。

しかし、現在は自立支援法が施行されて、重度の自閉症の方、知的レベルが高い精神障がい者、高齢者、著しく身体に支障の認められる方々が共に生活するようになって、職員の対応や支援も多様化しており、じっくりアート活動につき合う事が困難になったそうです。



利用者の作業を見守る阿部さん（画面中央）



作業風景全景

「作品をポスターに」

アート活動の担当をしている阿部さんは大学で美術教育を受け、その後、あかとき学園の開設時から職員として勤務されています。

今から30年前は、利用者の作品を使ったタイルでコースターや鍋敷きのデザイン、ウッドパネルのデザインに使用するなど、販売する製品の生産に力を注いでいたそうです。しかし10数年前からは作業にたずさわる利用者の高齢化・製品のニーズが減少し、作業としてのアート活動を縮小しなければならなかったようです。その状況の中で阿部さんは絵画作品をポスターにする事を思いつきます。

この時期『福祉文化論』『アートバンク』の流れが全盛期であり、『障がい者の才能はアートの分野で健常者と何ら変わらない』『才能に正当な対価を与える』という理念に阿部さんも共感していたので、早速、ポスターやカレンダーを作る実験を始めたそうです。

「注目される、評価される」

2000年に行われた全国公募の「ワンダー・アート・コンテスト」（旧障害者芸術文化協会主催：現在はエイブルアートに名称を変更）に作品を出展したところ佳作に入選。阿部さんにとって利用者の表現が認められた事はとても嬉しかったようです。



画材の使い方指導する阿部さん

さらに2001年、北海道の知的障がい者を対象とした芸術祭公募展に5名の利用者の作品を出展すると、5名の作品が全て入賞。あかとき学園の作品のレベルの高さを阿部さんはこの時に認識したと言います。

そして、利用者のアート作品を埋もらせないで、多くの人に見てもらおうと思い立ちます。深川市で『アートの原点 内なる表現の可能性を求めて』をテーマにした『元気なアート展』を開催。市民を巻き込もうとの思いで、作品タイトルの公募をするなど、アイデアを盛り込みました。この展覧会は市民に好評で、現在も続いています。

作品が注目され、評価される事によってアート表現に無関心であった保護者や親族からも喜びの声を聞けるようになったそうです。

「アート活動で感じる事」

阿部さんは、施設職員として彼等の生きている証をアートという視点で残したいと考えています。特に障がい者において、アート活動を保護して行かなければ、彼等の創作活動は簡単に出来なくなり、作品も出てくる事が無く埋もれて消滅してしまう危うさをはらんでいると言います。

継続したアート活動を行う事ができる環境を整えていくには、作品をアートとして可能性を感じ、表現の発展を見守る事ができる支援スタッフが求められていると言います。また、同時に、作品の保管・管理、発展の場の確保もアート活動において、大切な要素であらう、色々な方向で彼等のアート活動を支援して行かなくてはならないとの事でした。



フランスで開催中の「アール・ブリュット ジャポネ展」に出展されている平瀬さんの創作の様子
粘土に定規で細かく丁寧に×印を刻んでいます
以前の作品は下の絵の様に紙に×印を描いていました



上川圏域アートネットワーク ウエカルパ

代表 平川 覚さん(西原学園)

副代表 作田 由美子さん(大雪の園)

「アートネットワーク・ウエカルパの結成」

近年、旭川を中心に、アウトサイダー・アート展が開催されています。旭川図書館及び剣淵絵本の館においては「上川のアウトサイダー・アート展」、道立旭川美術館においてはスイスにあるアールブリュット美術館に収蔵されている作品と日本の作品の展覧会「アールブリュット・交差する魂」(2008年 主催NPOラポラポラ)アール・ブリュットを代表する作家の回顧展「アロイズ展」、地元の作家を紹介した「北海道のアウトサイダー・アート展」(2009年 主催NPOラポラポラ)など、しかし、こうした大規模展覧会の企画・運営は施設外部の人達が中心となって実施しているので、創作の現場に入っている施設職員が主体的に関わる場面は極めて少ないのが現状です。

ウエカルパ代表の平川さんによると、福祉施設で行っているアート活動によって生み出された作品を世の中に出していきたいという思いを現場の職員は持ながら、ノウハウの不足からなかなかその一步を踏み出せないという状況にあるようです。

こうした現実をふまえ、創作活動においてそれぞれの職員が現場で抱えている悩みや思いを共有でき、施設職員自身が自発的な活動をする機会をつくる必要があると考え、ウエカルパの結成に至ったとの事です。

各施設でのアート活動における共通の悩みとして、制作された作品を発表する機会が少ないという問題があるそうです。それについては、それぞれの施設で試行錯誤をしています、個々の施設では職員が日



「あそぼあーとてん」での展示の様子

常の業務で多忙であるという現実もあり、問題を解消する事が困難と言います。また、職員の努力で地元の公共施設等で開催することが出来たとしても、美術館で行うような大規模な展覧会の開催には到底及びません。そこで、剣淵町や当麻町、旭川市の上川圏域の各施設のアート活動の担当職員が中心となって構成しています。

この団体の目的は、「より利用者の活動や表現の幅を広げる」、「施設、事業所職員のアート感覚の育成」としており、既に活動を開始しているとの事です。

「展覧会開催の意義」

この団体では、展覧会の開催はそれ自体が目標ではなく、アート活動で制作された作品を通じて、作品や作家、或は、障がい者という存在やその現状を知ってもらう事に大きな意味があると考えています。また、関わる職員にとっても、展覧会の開催を企画、開催する事で、情報共有、アートの知識を得る事などの効果があるようです。

「施設利用者がアート活動に対して積極的な創作意欲があっても、職員側に十分なアートの知識が無ければ、適切な画材や環境の提供もままならず、さらには通常ならば目に留まる様な魅力的な作品も見出すことができずに、埋もれてしまう事もあり得るのです」と平川さんは言います。

「ウエカルパの活動実績」

ウエカルパでは情報公開やミーティングを定期的に開催しています。

結成して間もないが、2010年8月「おもちゃドリーム in旭川」(旭川地場産業センター)において、「あそぼあーとてん」を開催。各施設の絵画作品を中心に展示し、子供達が自由に段ボールハウスに絵を描いて家をつくるワークショップを行なっています。また、9月には北海道医療大学のオープンカレッジにて「わたしの持ちたいバッグのかたち」、「わたしの感じる秋のかたち」の2講義を行っています。

ウエカルパでは上川圏域の障がいのある人達の創作活動を支援している福祉施設職員のさらなる参加を期待しているとのことです。



「あそぼあーとてん」での展示の様子



「あそぼあーとてん」ワークショップの様子 展覧会は1日(7時間)で1300名の方が来場していただきました

NPO法人アートユニオン・オコック

代表 宮田 美光さん

「アート活動の概要」

NPO法人アートユニオン・オコックでのアート活動は網走市内の施設にて代表である宮田さんの指導のもと開催されており、活動日は展覧会等の各種イベントの予定によって異なりますが、日曜日を中心に平均して月に2〜3回行なっています。

利用者は病院を退院した後にリハビリの一環として通っている精神障害者が7名と知的障害者の1名が利用者間で連絡を取り合うなどをして、自主的に創作活動を行っています。

「網走のアート活動の沿革」

指導者の宮田さんは若い頃は画家を志していたこともあって、アートに対する専門知識も経験も豊富な方です。

宮田さんは看護師として20年以上精神病院でアートを利用した療養活動を行ってきた経験があります。病院では夜勤など不規則な勤務体制と、材料費の制限などがあり、十分なアート活動を実施する事が困難だったと振り返ります。また、アート活動自体にそれほど専門的な知識は必要とされなく、療養活動の副産物として描かれた絵は消耗品としており、作品として位置づけることは無かったと言います。

1999年に宮田さんは、精神障害者を中心にアート活動支援団体として、「網走障害者芸術文化協会」を設立しました。当時は専用の施設が無かったので、空き教室を借りたり、野外での写真活動や店舗のシャッターに絵を描く等の活動をしていたそうです。

このような活動実績が実を結び、網走市の理解を得られ、活動の拠点として、旧公民館を借りられるようになったとのことでした。



作業風景 利用者が自分達でスケジュールを決めて作業しやすい環境で個々に創作しています

この体勢の変化に伴い、団体名を多くの人に親しまれ易いようにする理由から「アートキューブ」にしています。

「心の病や障害を社会全体の問題に」

アート・キューブの基本的な活動のコンセプトは、「障害のある人たちがアート活動を通じて、自己の尊厳と自信を取り戻し、生き生きと生活していくことを支援していく」としていたそうですが、精神障害者の作品展覧会を開催するだけでは理解者を広げる事は難しかったようです。そこで宮田さんは「心の病や障害を社会全体の問題」と捉えるところから活動を考える様になったそうです。

高齢者の社会的孤立、疎外感を高齢者の表現活動としてとらえて、高齢者の書道展を開催したり、子どもたちにアイマスクをして物に触れたり、粘土で物を作ったりして触ることの大切さを体験してもらったり、さまざまな形でアートを通じて障害への理解を深め活動を展開していきました。

2007年には、子供たちに商店街の空き店舗を使用してアート教室を行なう事が評価され、「北海道福祉の町コンクールソフト部門」で、優秀賞を受賞しています。様々な試みによって、団体の活動は市民に理解される様になってきたそうです。

地域での活動の機会が多くなってきた事もあり、障害者のアート活動グループを「アート・キューブ」とし、障害者や地域社会全体へのアート啓蒙支援を行な団体として、NPO法人「アートユニオン・オコック」を3年前に新設しています。



本格的な画材が並んでいる 作業台は支援してくれるメンバーの木工さんが作ってくれました

「アート活動で感じる事」

宮田さんは障害者のアート活動といえども、個々の向上心や心の成長を高めるためにも、作品にクオリティを求める事が大切だと考えています。また、自立支援の観点から、作品の販売は個人の意欲を高めるのに大切なので、まずは、作品をポスターやポストカードなどの印刷物にして販売しています。作者は購入した人に、握手を求めたりするなど積極的にコミュニケーションをとる姿が見られるそうです。作品が売れということも創作への意欲を強くさせる効果があるようです。

絵を描いたり、歌を歌ったりする事は医療機関や社会福祉施設等で行なう事は多々有りますが、そのような場所では本格的にアート活動をしたいと思っていても集中して創作活動が出来る環境ではない場合が多いため、適切な環境や指導が必要だと考えています。

たとえどんな障害だとしても、「表現する」という事に対しては指導者として、真剣に向き合う必要があり、より意識的に表現するために作品や活動に意味合いを持たせる事も指導者の大切な仕事だとも考えています。

「今後について」

現在の問題点としては、アート活動を支援する為の人手が足りないと言う現状があるそうです。特に地方は慢性的に人材不足という問題があるので、都市部の美術大学の学生が研修を兼ねて地方に出向くという様なシステムが出来ないかと考えているそうです。

また、NPOの関係者には福祉関連以外の団体もあるので、「障害者」と言う枠組みを超えて、一般の方も一緒に参加できる展覧会を開催したいと考えているようです。

宮田さんは「障害者も地域住民の一人であり、地域文化を支える一人であることを意識して、今後ともアート支援活動をしていきたい」と意欲的です。



上)この施設で制作された沢山の作品を紹介する宮田さん
下)丁寧に額装された作品や、作品を縮小して印刷したものや、利用者が撮影した写真などのポストカードがフレームに入って並んでいます 背面には今まで参加して来た展覧会などのポスターが貼られています

地域活動支援センター さくらんぼ

手作りの店 ほわっぽ

札幌市厚別区大谷地4丁目4-1

担当者：中山聡さん、吉川奈末さん

「活動の概要」

さくらんぼ作業所は、2001年に知的障害者の通所施設として開設されています。障がいが高くても関わられる作業所として、陶芸を柱に、牛乳パックの再生和紙作り、フェルト作業、銅線のリサイクル作業などに取り組んでいます。

現在は15名の方が利用しています。陶芸での作品づくりでは、初めて粘土に触れる人が多く、作ると言うより楽しく粘土に触れてもらう事で自由に好きなものを作ってもらうことから始めたそうです。その後も、型にはまったものを作らず、彼らの個性が生かされた物を作ろうというコンセプトを大切にしています。フェルトを使った作業は容易に多様性とんだフォルムを作り出すことができる事から、現在は作業全体の中で占めるウエイトの高い作業のようです。

「アート活動の推進と課題」

さくらんぼでは、外部講師を招いてのアート教室も行っています。全てを職員で行おうとせず、講師を招くことで砂絵、葉っぱや枝を使った作品づくりの提案など、新鮮な刺激を受けるそうです。楽しく絵画や造形をしていく中で、想像力の高まりや表現力の幅が豊かになる事を期待しているようです。

中にはいつまでも一人で黙々と制作に打ち込む人もいれば、ちょっとしたアドバイスや働き掛けで絵や物を生み出せる人もいます。担当の吉川さんは創作において、彼らの個性や表現力を引き出していくために、マンツーマンの支援が必要であると考えていますが、しかし、作所は障がい者の働く場として、給料を少しでも上げるための努力が必要となります。従って、全体の中で物づくりにかかる時間を十分にとれないのが現状のようです。



担当の吉川さん(左奥)と作業風景 手前は中山さんがコロコロを組み合わせて作った作品

「アート雑貨の制作」

さくらんぼ作業所では、作業としてユニークなアート雑貨の製作をしています。

本来はフェルトを使った作品は、1対1で指導するとマフラーやコースター等を作ることが出来るそうですが、職員の体制などの事情から、フェルトを丸めた玉を作っています。この玉の製作は容易なので、作業に向いているそうです。出来上がったものは単純に丸い玉の形ですが、色のバリエーションも多くとっても綺麗です。この玉はとても可能性を秘めていると担当の吉川さんは期待しています。これまで、アイデアを出し合い、フェルトの玉でモビールやアクセサリ、オブジェを製品にしています。今後は幼稚園の教材やワークショップの材料などの素材としてフェルト玉の販売方法を考えたいようです。

「アート雑貨の効果」

さくらんぼでは、福祉バザーなどで雑貨品を販売していましたが、福祉の授産品としてしか見てもらえず、価格も安く設定していたといいます。次第に品物の評価によって、一般の店舗でも販売できるようになり、適切な商品価格をお店側から指摘される様になったようです。作業所の敷地内にはログハウスを設け、「ギャラリーほわっぽ」として作品が展示販売されています。

雑貨店や書店などでも作品販売しており、作者はお店の担当者や一般の多くの人と知り合うことが出来るそうです。



カラフルな素材としてのコロコロが大量にストックされています



「アウトサイダー・アート／陶のかたち」展（江別セラミックアートセンター2008年企画／主催NPOラポラボラ）に参加された佐藤さんの陶芸作品



隣接されたログハウスの展示販売所「ほわっぽ」の中の様子
上)うつわ等、陶芸作品でも実際に使用できるものが並ぶ
下)フェルトの作品はコロコロだけでは無くアクセサリや小物等の、可愛い実用品があります



コロコロは組み合わせてモビール等の製品に 他にも作業所で製作された作品が沢山あります